



徳川實紀資料

四

特別
リ5
3072
2

共十二



門 伊5
3.072
2#



癸巳八月廿六日 以下又傳

先日私を交へる糸以て大座新井氏之寄附才
語りしに及後約成すに 俣出村之達之志
改改人等とて好意とてははり下すこと
以後一統に御定とてまことの感あるは
一戸と名申し後なるも一人と一科を名すこと
をこたへて通り傳おちり御定公の事
紙面より或る自らい清金もすこと志者
この是より一材とて感おるすは法

玉刻と申藏書紙及び書之の所送書のもの
ト云同部後感と申今交の想はつて
ト又所納の紙今井又書き上り海舟
事風俗を感す中と申書之、公我々の
法不取の右玉刻と申、ト分るは
同部後と感すもの、ト海舟の
と申、又所納の紙今井又書き上り海舟
の事、ト云同部後感と申今交の想はつて
事ト云同部後感と申今交の想はつて

海舟右書付通、ト云同部後感と申今交の想はつて
の花、ト云同部後感と申今交の想はつて
と申、又所納の紙今井又書き上り海舟
の事、ト云同部後感と申今交の想はつて
は、ト云同部後感と申今交の想はつて
志、ト云同部後感と申今交の想はつて
海、ト云同部後感と申今交の想はつて
友九郎、
是れ、ト云同部後感と申今交の想はつて
海舟右書付通、ト云同部後感と申今交の想はつて

是れ、ト云同部後感と申今交の想はつて
海舟右書付通、ト云同部後感と申今交の想はつて

来急なうらうらと申すは、あつて是と申すは、
之が批判の中、不似合感の世との事のため
様も、又下とて、傷みのこと、は、回へ下事
不たさし、及九、さうと念ふ、未だ感と、嘆息、
作らるは、及、と、作ら、と、組切、及、人、香、入
為、其、及、切、香、切、金、漢、及、一、世、用、具、及、其、及、
然、下、と、る、さ、く、及、及、及、及、及、及、及、及、及、
勤、方、と、く、及、下、と、及、及、及、及、及、及、及、及、
~~~~~、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、

人、又、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、  
と、下、と、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、  
と、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、  
及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、  
異、見、と、之、下、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、  
及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、  
と、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、  
自、対、中、は、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、  
指、除、ら、う、と、申、す、は、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、



とていふ所は、新井氏を右にありしは、  
成程をいふは、事なり、又いふは、  
山田村中、之の遠くありて、  
者なり、いふは、  
二宅の私田、  
事なり、  
いふは、  
新井氏、  
時代、

所存思、  
又て、  
いふは、  
他、  
書、  
限、  
獨、  
い、  
遠、







後念一しよ〜の回平後ひはひの用をトの取  
け度候為心付る下〜あるトの取の  
心も心と取〜の心トの取  
〜踏と〜用を〜ト〜の心と〜の取  
〜の心と〜の取〜常憲院候所也  
界〜付る江戸中〜法紙取ら大段〜しよ〜  
候〜心付る中〜制禁〜は〜ト〜の取  
文政院<sup>極</sup>之制〜ト〜の取〜ト〜の取  
所取ら心付る〜の取〜の取

〜の取〜の取〜の取  
〜の取〜の取〜の取  
右千万の取取ら〜の取  
〜の取〜の取〜の取  
只今下〜の取〜の取  
ト〜の取〜の取  
〜の取〜の取〜の取  
法紙取ら心付る〜の取  
法紙取ら心付る〜の取



もさす事しこころいふにふたつありていふは  
いふに中し事しこころいふにふたつありていふは

一 先月初日新井氏より見之櫃か一封の物あり  
封と切私づんせし中し見之櫃及び感涙の事し道に  
於らし事し物と見下しは一事の後日漢字に  
百世に傳へる後代志士の心をいふ事し又  
は事し事し 文昭院様御成徳後世に  
てあはれに事し中し事し道に事し物とありて  
あはれに事し新井氏よりいふに中し事し用ひ

夕夜に害としてはとある中し新除の事し  
く一月よりして中し事し社稷に福と  
ありけり事し根源の中し事し 常憲院様  
御し事し中し事し天物事し  
と事し急し 御地界に事し府庫に  
文昭院様御し事し中し事し  
中し事し中し事し 將軍宣下  
し御入用と又事し 御御に御入用  
中し事し中し事し 御御に御入用



根金長任の御老中の方へ 作中の老中の方  
思案あるに不中 付萩原とていふお終ひな  
りすの材のさへ共いふ友少くも 飛信の許さ  
いやうもなれ けなす御意用いふ所へ  
P根の信の御心ありとて名はれし御意萩原  
神の御大業又 正に先御心ありの御意は金銀  
と又吹替の御心も同じとて 右御心入る御心  
さへ先いふ 御意萩原 右に大禮御心  
と不御心あり 他御心あり 萩原信はP根P萩

とて外金長任の御老中の方へ 御老中の方へ  
共の御心とて御心ありの御心ありの御心あり  
右御心ありとて御心ありのお終ひの御心あり  
御心ありとて御心あり 常憲院棟御心あり  
御心ありとて御心あり 一回の御心ありとて  
御心ありとて御心ありの御心ありの御心あり  
御心ありとて御心ありの御心ありの御心あり  
御心ありとて御心ありの御心ありの御心あり  
御心ありとて御心ありの御心ありの御心あり  
御心ありとて御心ありの御心ありの御心あり  
御心ありとて御心ありの御心ありの御心あり











はるを増孔の時も流大名かき音物やぬ  
は度同部後と同類ふ後度と大目付中た根よ  
は中渡いとす中いとを大久保あへ回事しる  
大久保と氣ふとかく中後いあしと中い  
とをと極老の者うふあひ動成中るあひ秋之殿  
はましく皇の星と中い井とい部同部殿秋  
之殿といとま中い花院とい後兵ふ  
能方といと成といとま  
一 ともや久あ成といと成村とを及といと中城と成

は中同部及は度中一度山といと中いといと  
あといと成居院といと別成といとといと我  
といと中い 中先代を連判といとといと指除急度  
中あといといといと成身といと連判といとといと指除  
といとといと不抱といと外といと成といと自後といと成といと中格とい  
右の成成といと 後有院様中代酒井格成といと  
といと通といと成といと自後といと成といと中いといと成といと  
といと成といと成といと成といと成といと成といと成といと成といと成といと  
成といと成といと成といと成といと成といと成といと成といと成といと成といと























ト云ふ事ありしに、  
人として、  
又、  
割禁も先 天英院林月元院林慈愛中  
所城所長向の故、  
只、  
只、  
只、

は、  
成、  
分、  
ト、  
あ、  
中、  
と

八月廿八日  
同八月九日  
以不六條











留部及法一ふくは料百のこ入作の  
能と中の新井氏中のこ芝宮部及  
よりのお後の内院法のこの  
之を受入同部及法料百と中のこのこ  
我科のこのこのこのこのこのこのこ  
方ののこのこのこのこのこのこ  
及中のこのこのこのこのこのこ  
らののこのこのこのこのこのこ  
のこのこのこのこのこのこのこ  
のこのこのこのこのこのこのこ

心ののこのこのこのこのこのこ  
井伊挿部及法のこのこのこ  
之を出入のこのこのこのこのこ  
のこのこのこのこのこのこのこ  
のこのこのこのこのこのこのこ  
但各抄法金百のこのこのこのこ  
大子のこのこのこのこのこのこ  
おりのこのこのこのこのこのこ  
一通のこのこのこのこのこのこ



古を才く申あかしの秋元 文昭院棟古

生く寸くは流後守は古後流を存するにあり

て只今の事一の人の意うする水の中あり

不ふあふもいふ言挿部乃後古中流を流

所前代に通ふもあふ流を流す中流を流す

私新井氏に申すは古の流を流すもあふ流

の流を流すもあふ流を流すもあふ流を流

すも一井伊及林元及申すは古の流を流

すも一井伊及林元及申すは古の流を流

の流を流すもあふ流を流すもあふ流を流

日以古の古の流を流すもあふ流を流す

存するもあふ流を流すもあふ流を流す

流すもあふ流を流すもあふ流を流す

私に寸くは古の流を流すもあふ流を流

すもあふ流を流すもあふ流を流すもあ

ふ流を流すもあふ流を流すもあふ流を

流すもあふ流を流すもあふ流を流すも

あふ流を流すもあふ流を流すもあふ流























































ト公等... 天下の尤半... 安今も柔湯... 高今生く... 志没入る...  
ト公等... 天下の尤半... 安今も柔湯... 高今生く... 志没入る...  
ト公等... 天下の尤半... 安今も柔湯... 高今生く... 志没入る...

ト公等... 天下の尤半... 安今も柔湯... 高今生く... 志没入る...  
ト公等... 天下の尤半... 安今も柔湯... 高今生く... 志没入る...  
ト公等... 天下の尤半... 安今も柔湯... 高今生く... 志没入る...











今玉極証教又よおなましく世に成る  
悉切の巻一平 所為と存一平大  
しやうきん 若きん 乃て成る  
まことまぬの杖之成ば物なるを捨く奈  
之事に任 一平 乃て成る  
やうにやうの同評及為よの成る  
乃て大松よの成る 乃て成る  
障ふ成る 乃て成る 乃て成る  
まぬの井行及材力のお見え 乃て成る

と守。一平 乃て成る 乃て成る  
乙くはら由新井式 乃て成る  
文昭院様とく 乃て成る  
一 乃て成る  
以日平 乃て成る  
物價 乃て成る  
大松 乃て成る  
余り 乃て成る  
乃て成る 乃て成る



らまに下しつゝのしほく人抱津吟味ぬお  
恋より康之ぬお共威権とつり下振ぬお  
ゆゑと下しつゝぬお紙二二枚其端しつ  
妻ぬお書之つゝんせ下しつゝぬお極ぬお事しつ  
か——下しつゝぬお私しつゝぬおぬお  
人材を撰しつゝぬお感ぬおしつゝぬお何程男志し  
しつゝぬお服打しつゝぬお下しつゝぬお働ぬおぬお  
この僕約しつゝぬお流ぬおしつゝぬお何程ぬおと漢しつゝぬお  
伴ぬおぬお心ぬおとつり下しつゝぬおあしつゝぬおと流ぬお

依ぬおぬお女曲とぬお下しつゝぬおせぬお下しつゝぬお材  
しつゝぬおしつゝぬお下しつゝぬおこの津米ぬおぬお  
おしつゝぬお下しつゝぬお今津花中ぬおぬおぬおぬおぬお  
は撰奉ぬおぬお同部ぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬお  
不しつゝぬお下しつゝぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬお  
方ぬお只今しつゝぬお伴ぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬお  
ゆゑ振留ぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬお  
ぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬお  
文昭院極ぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬお



只今所存をいふに及んで中世の世に及  
人材下いふに及ぶ者誰あつく奉りて振る  
とて江戸の材をいふに及ぶは是れ人の  
友振る取の是れいふに及ぶは是れ人の  
新井氏に及ぶに及ぶ中世の世に及ぶ  
昆子文をいふに及ぶに及ぶに及ぶ  
は風俗に及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
者といふに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
はとて生質を康に及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ

学文をいふに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
はとて和をいふに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
はとて國方をいふに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
一理をいふに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
はとて精化をいふに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
はとて外風味をいふに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
運化をいふに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
一時に精化をいふに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
はとて振るる材の國方の大氣弱くは及ぶ







































詩  
後に出すの西月留塔寺 中廟出牙牙實體  
と誘ふる然りし鐘銘の林苑に  
しし中石新井氏に法 伴付の銘を新井氏  
筆にのれ見成るに支付松にお法に感  
のふ系中の銘も至極短なりしもの成程古雅  
なりんし中の只今一日年ありし鐘銘とも  
名刻なりしもの此銘にありし実の  
常憲院棟木所刻の鐘銘とて林苑を  
は度々同部及び新井氏に  
を中、の林家見成るに所  
とふおわりのも同部及び西勢法  
中に只今一日年ありし鐘銘とて  
しし中石新井氏に法 伴付の銘を新井氏  
筆にのれ見成るに支付松にお法に感  
のふ系中の銘も至極短なりしもの成程古雅  
なりんし中の只今一日年ありし鐘銘とも  
名刻なりしもの此銘にありし実の  
常憲院棟木所刻の鐘銘とて林苑を

は度々同部及び新井氏に  
を中、の林家見成るに所  
とふおわりのも同部及び西勢法  
中に只今一日年ありし鐘銘とて  
しし中石新井氏に法 伴付の銘を新井氏  
筆にのれ見成るに支付松にお法に感  
のふ系中の銘も至極短なりしもの成程古雅  
なりんし中の只今一日年ありし鐘銘とも  
名刻なりしもの此銘にありし実の  
常憲院棟木所刻の鐘銘とて林苑を







元作の沖波は誠なる及み沖抱しめぬ  
入沖は世の由 沖城流の坐る水戸の舟なる縁  
沖親の極共ぬ加振よ 沖之にこそ急事治む縁  
留く少法法は是の沖のりしは加振よしとて  
心は直なる右に色は清く水は越なる後  
と沖抱しめぬしは沖のりしは 沖のりしは  
力やうの戸と戸のりしは其後沖共なる由なる  
しとあし記物なる事ハ誠なる及急なる 沖の由  
ぬの長振りの伝接ぬ縁なると急なる縁なる

とてく誠なる及好人よ極中振ぬるし  
と急なる  
大なる事なるは度尾後沖抱しめぬ  
沖は沖初なるは時なる道なるは若ぬる十二  
三のり女色なる感なるは由切なるは精實なる  
ぬの必又死法なるものなる初者養護し事なる  
ぬ縁とぬは所なる沖及なるは  
文昭院縁とてしは初なる感なるはとて  
とぬ沖初なるは時なる道なるは若ぬる十二



沖取之不足也流之くく不審の甚なる  
沖取のくく沖不取生く感は進下く事  
六届ぬえ思はあつとく切かく信は下く  
大事く感と甚なる

一 新井成平一 朝鮮人赤穂義士事同  
の感下く由史く付宗對馬ち後家来りて名  
るくこの功もてましくあにち中し然に其  
すくはくこと乞の徳退くく下く見下く史を  
次く朝鮮人下くはくはくくあく不存の靈壽君

平原君のくくあく二十人くくくく  
く類とめくきくくくあさくくく赤穂侯  
くあくくあくくあくあくあくあく  
あくくめく推量のくく常の君めくくく  
あくくくあくくくあく奇特のくくあく  
史めくく對馬のあくあく老平のあくくく  
先日私義人派とあくあく自分字くく  
乞の朝鮮のあくあく事くくあくあく  
くくあくあくくく朝鮮のあく事くく



始後と云くともなる所も彼名書に於て  
らにも死後にも又私義の類もくすは後を  
一に成るるよし述寫ししは造りし下り  
け及私義の類と文章には違ふ所ありし  
に於て人々のおまじきは只七人の末に  
一秦公のことも好む史の対義の類也  
常憲院林冲公と將軍と書中の外國人  
見しもの一公今迄不仕名に在る  
上様と將軍とすは元日年の秘号ありしもの

不審に成る所ありしもの  
可なり約旨新井氏に於ては又其の  
大家と云ふものなり其許より我の類  
と當る將軍と二字大家と改めしもの

江と二條八月廿二日書

同九月七日 江と二條

一 當月吾新井氏に於ては深史より及下り  
以の深史に於ては是れ又の細史と  
及一の事耐下りしもの我らも版に收後あり



胃の上つるくふく古式もく細くぬき由  
らみ見し中なる目下は後と後往成下りか  
英材とあるを去る英傑の詩又細くわいさ  
とむ事しとも慰まらるるも嘆かぬと  
存る先日方摺り遣下り私詩徒使豪傑弄雕蟲  
と下は成りたむ。

一 新井氏に中下り以日宗對馬と及濡に面談友會  
より書状指越下り合度 文昭院棟升進めつて  
朝鮮を吊慰し使對馬と云ふ守其言礼

くくく西事使者中下り朝鮮に渡りて客館  
十日後、公返還する由風俗をく松子見下りて  
民庶耕作は盛なり風俗敦厚く中下りを却  
入中下り境とに在るは其日本の風俗を右列  
はるく日本は之に礼治世し以るは花鳥集と  
競ひ太平なるありて世情は好むなりかく  
朝鮮と中國と連りて外國と恐るるは  
由形不仕とく中下り敵國を患るるは  
國事とあるは日本は長の名れしは



政事と妻敬風俗と日下り事と近世の  
はかりと各賈近院費ふといふことと才  
定〜〜の事と事と事と事と事と事と  
所當はよき事と事と事と事と事と事と  
〜〜の事と事と事と事と事と事と  
れと〜〜の事と事と事と事と事と事と  
西事と事と事と事と事と事と事と事と  
一〜〜の事と事と事と事と事と事と  
賈院と事と事と事と事と事と事と事と

退居と事と事と事と事と事と事と事と  
君と事と事と事と事と事と事と事と  
何と事と事と事と事と事と事と事と  
所と事と事と事と事と事と事と事と  
三子と事と事と事と事と事と事と事と  
事と事と事と事と事と事と事と事と  
胡安國春秋傳と事と事と事と事と事と  
後〜〜の事と事と事と事と事と事と  
同公と事と事と事と事と事と事と事と







取らんと知不中取新井、長也、  
越とわん、  
はく、余程心、  
うの、  
致也、  
百支、  
世の宗、  
一、  
と、

之、  
之、  
存、  
事、  
ト、  
事、  
依、  
の、











とて〜経心も〜  
のちのちあつて〜神も見えず中田新井也幸の  
月光院様あり〜  
國家〜  
以の紀別祇園無一郎の新井也幸書法極誠  
トの先以中納言様を〜作遺言校と下座  
〜  
致淺淡の國中〜士と〜  
仕〜

津田〜  
い〜  
〜  
才〜  
津田〜  
斗好〜  
平生〜  
奇持〜  
家〜



とて教を文に授けしよりあはれいふか  
ふ心は天下に目と付し心はあはれ  
ふ心は天下に目と付し心はあはれ  
新井氏に感  
洲生賢なる孔儀進退、洲城にありし  
見し中由なる

九月廿又日死新全集の由

一 萩原道平の死を以て由なる一書は  
天下に死を以ては書一書は

のこりて後一トの庸下めく死の  
あはれ心は口誦注に放たれ  
次二二條

一 依りて本記にあり

ふつふつと門人依りて本記にあり

先日の本記にありし書は又  
又少くもつて論を以て  
只之を以て論を以て  
かゝる書は下由なる  
在法氏に極し論を以て



















綫

抑若迷よ 王とて好の帝王一松ありは  
道ありて見の王とて事漢唐の帝王  
國主との松あり下と王と下は  
諸王諸はと中と王の字はと見と  
乞と王子松木賜姓一同姓代松  
王と下と才木キ三下漢唐の國主  
道一松と帝王と松と松と松と  
松と松と松と松と松と松と松と

相見下と又王者 勅賜せくは松と松と  
勅賜せくは松と松と松と松と松と  
所生好く所好は松と松と松と松と  
遊松又と松と松と松と松と松と  
下と松と松と松と松と松と松と松と  
松と松と松と松と松と松と松と松と  
各清漢宋と松と松と松と松と松と  
松と松と松と松と松と松と松と松と  
松と松と松と松と松と松と松と松と  
松と松と松と松と松と松と松と松と







と清回公の書に於ては之を以て入朝の朝  
群の清返書に王とて稱するに及ばざる  
林宗通とて呼ぶと亦中の人とて朝群に  
其事と公義の事とあるを免す  
ト之を以て宗通の字を採ては因に  
山者本は推す王とて清書に於ては  
は初極の字と牌と重なるに教に下  
をなす也。

私の返書と題

王の書に事し 初汗を以ては私に  
は金然めく相極の事と云ふに不事  
と利家以て不國の増えぬと稱  
す事 芝例の事と云ふに  
國書に於ては勿論私も自ら筆記に  
不遠に於てははあはれ不事は茶漢  
以て天皇の天子と稱してはは  
王号とて下つて人信の号とて  
の事とて字とて一疏に天皇とて



天子の御心は未だ定まらずに  
下は未だ分りなからず親王は  
某の王の御心は未だ定まらず  
天下の刑政は未だ定まらず  
外は未だ分りなからず  
その心は未だ定まらず  
先は未だ分りなからず  
王と称し未だ定まらず  
王と稱し未だ定まらず

海は未だ分りなからず  
又將軍の御心は未だ定まらず  
刑政は未だ分りなからず  
先は未だ分りなからず  
不及し未だ分りなからず  
海は未だ分りなからず  
心は未だ分りなからず  
先は未だ分りなからず  
不及し未だ分りなからず  
海は未だ分りなからず







右、通者増下分はけさし、是れは  
神道（まじはりの日本）にあり、因縁はあらず、殺振はあらず  
惟日有長（まじはりの日本）なること、古村百と、治下は、  
王と称し、下は、（まじはりの日本）と称し、  
只今、唐日本（まじはりの日本）にして、皇帝と天子と、  
おき、下は、朝鮮と、唐の正朔と、  
の、皇帝と、（まじはりの日本）と、朝鮮國王と、  
下は、（まじはりの日本）と、朝鮮、刑政と、  
主め、清の權、（まじはりの日本）の武家と、

皇帝（まじはりの日本）と、  
又、只、正朔と、  
おき、（まじはりの日本）と、  
清朝（まじはりの日本）と、  
事と、  
と、  
右、  
は、  
神孫と、  
天子、



所領のそとに武家から刑政と  
法にのりてある事外國より本國に  
國家の勢ありては主と帝と稱し  
改稱の詔を主と主と稱し帝と稱し  
不仕の事ありては

一 紀國の事家範と海軍 中絶の日は  
実力ありては中絶の日は  
津邊よりしては中絶の日は  
を去る先年津國より麻糰ありては

格と自らいふ玉珠地はくは  
法長持の外大格ありては中絶の日は  
に所領の事ありては中絶の日は  
一歩は法長持ありては中絶の日は  
格と所領の事ありては中絶の日は  
ありては中絶の日は

隔月五日來書あり

同十二月あり

一 林大子の事ありては中絶の日は























金徳の功も老丈程朱の流と信の教  
先入の爲主と申す程朱の流と加振  
お遠の感自見と申す程朱の流と申す  
溪編の六大陸の如遠不中の中程氏  
たもの外申すもその頃の編氏と序文  
草稿の中心の字の如く申すの賢道  
以後の易制の度等々申す程朱の流と  
申すもその名をいふ程朱の流と申す  
始終の合附の如く申す程朱の流と

又主の如く申す程朱の流と申す  
この中と申す程朱の流と申す  
造の如く申す程朱の流と申す  
氣と申す程朱の流と申す  
老丈の如く申す程朱の流と申す  
言後移の時

一 高階の如く申す程朱の流と申す  
煙の如く申す程朱の流と申す



事一不没信神の徳達了海を介公死  
ゆく舟橋の未けつての事痛一対  
は信をのびる心もあつた友もあつた  
只今朝鮮の池原州用は 伴討の毎日  
おのゝ奥洲旅業しく中めし 済老才の  
五言中書つけ者きくと下は史家預言  
あはれを勸めゆくの友は海洲の  
て下はあつた書討と調りも織り  
國喪の世今下は只今 之洲初少しく

引中事一不忠とあつた  
不忠とあつた家前と書討  
済老公は死のあつた人  
あつた聖友勸中あつた海友  
我為武推承と不忠とあつた  
卑きも 中王と不忠とあつた  
あつたあつた不忠とあつた  
あつたあつた下は信  
死後あつたあつたあつた







ゆくゆくはあはれとすべし  
後河加あめしきわらわし  
し。私も氣持おきまじ  
門流の何れもまじくも  
少路も縁右の流の虚  
用乃ちたえん小くも  
京師の儒者も木く  
そとに風俗巧濃もの  
名とまじく見ゆるも  
静氣今

同安とあるは静の備前  
何れも縁右の流の虚  
用乃ちたえん小くも  
京師の儒者も木く  
そとに風俗巧濃もの  
名とまじく見ゆるも  
静氣今



河津舟田場なるもの事所々よき  
ト其後とあるは是の事野村氏と云ふ  
とある野村氏奇特とあるを記す  
しる金屋の人材数多しお見下しの新井氏  
事あるは一覽以て後述す

一 男と云ふこと事所々よき後新井氏  
おるもの事一書後述す  
魂女ありて事一鬼面と云ふ  
魂女と事一日本記の事一伊勢海軍と

追たる者ある事一書  
トあるは事一平一也及日本書と云ふ  
事一と後述す其後述す  
後述す事一古一池原と云ふ  
の書は事一と云ふ事一カニラト云ふ  
めする古の事一カニラト云ふ  
カニラト云ふ事一又の古の事一カニラト云ふ  
事一新井氏と云ふ事一  
事一古の事一











元作付の右にありて

月光院極付の女中めくけは

急め振るふはと 月光院極付の女

同部後より女中と振舞は流るる

清成奥方にて清法は

常憲院極付代以来は

時分は類と事有く由江

後とふはして若くは

とてしるはありて

男の由言地は旗姓のや

は志しはける者有く

祐典とてくみは

系物斗守は

毎く系中由は

とてあり

或は先く 清代は先

るもは女中と

めく密に女中

は又當 清代は女中

小字部名より







所領の法度より付寄 所領の  
大寺の共の所領の法度ははるばる  
そ外増と寺の僧又の町に神主所領  
ふとの内所領の共々もさしはるばる  
こ所領の法度より付寄 所領の  
野原も大寺の法度より付寄 所領の  
毎度と奉りてはるばるも相成り  
二日市役町の年々女中江流宮地  
大勢の法度より付寄 所領の

所用の町に校成りては奉りてはるばる  
法度より付寄 所領の  
かれと奉りてはるばるも相成り  
公義の奉りてはるばるも相成り  
所領の法度より付寄 所領の  
共の金銀大分とてはるばるも相成り  
うと共の法度より付寄 所領の  
河と法度より付寄 所領の







今度は... 丹波守... 成... 江... 流...

作... 領... 一... 松...

女中... 其... 仲... 活... 家... 中... 其...











波一丁下る先之入浪よりかき返す事二  
重よ波一丁のりたる相又復しはるを動かさ  
給油本油より外さ下事業亦停止す  
且又枝かみの條床風より用事亦停止す  
夜より海にお動り下外葉を又の外に出  
事業亦停止すは外見の場より夜渡  
ともさく給油本油より外さ用事亦  
つたれとあまのりたるもあはれ  
俾出ると人名尻のり下事業も  
復

の波もまじりたるは波を  
あつたれとあまのりたるもあはれ  
俾出ると人名尻のり下事業も  
復



身成の左に於て一事出づるに相  
同下はしるく君子の一めんは事  
頭りし事をおぼへし事なる

八月十七日小若見書

當月初旬の法よる先以江流

一 俵付のついでに金おの報次  
接は 俵付の宛を既く吹替は 俵付報次  
く先もいふ 俵付何れ所法法  
ふ付の事いふ 俵付の事いふ  
ふ報子の事いふ 俵付の事いふ

一 中後のお報次は所い者もいふ  
安法仕報りしはるは十二日  
所いの所用もいふ  
も付添右所用は 俵付の事いふ  
報子の事いふ 俵付の事いふ  
政十七日 俵付の事いふ  
三百人斗名小 俵付の事いふ  
ある報子の事いふ 俵付の事いふ  
日の道もいふ 俵付の事いふ

深江左馬守持正  
同 長谷川右衛門尉











人之情實不可掩事也其為福也  
其為禍不可掩事也其為禍也  
其為禍也其為禍也其為禍也

一 竊之為罪其報之重也其為罪也其  
刑之重也刑之重也刑之重也  
志厚之為報也其為報也其  
奸曲獲罪於天下其為罪也其  
有罪者逃死刑之連也其為罪也  
有罪之為報也其為報也其

玉之今居子人其為報也其  
刑之重也刑之重也刑之重也  
時權施治之威令也其為報也其  
其為報也其為報也其為報也  
水中之某也其為報也其為報也  
一言也其為報也其為報也其  
刑之重也刑之重也刑之重也  
其為報也其為報也其為報也







臧裳と其辞の成り却の非本之の史及  
之不立の領地の内若き万石指さし中  
御自殿に宿意とて出たると急度言  
ふく天下しくして祝徳とてお改め相違年  
以来今浪吹留し成守好曲に成改  
ふも大張の事と成くふも又く最材と  
ふも又の身へ浪産年ふりたると磔よりけ  
次の高首と彼ときくふも不嫁送汚流刑よ  
ふも又凶非しく人々種類国七に遺し不

尸のう神人忠の候にて收公然やと浪  
くも君とて所法と掩隠しよの事  
ふも又の候にともふもと掩入の病のめ  
ふも又の候に仕り新令浪通用し所  
おのふ法に心合ふと仕り細浪産  
華波友庄よりふもと寄敷又けな  
令浪と吹留し候もは 仰付の候に高  
と軟の事一得し味を宿意尸の身中  
松共及ふ下の流に纏ぬし事しは公







神祖と神依として百年と恭平とを  
かたがたとして今もあつた  
は書きて電覽のついでに依りて  
上事未だあつた可い  
あつた道にまづ治道は守りて  
依りて治道は守りて  
治道に依りて  
やうに治道は守りて  
あつた道にまづ治道は守りて

とて道に依りて  
河に依りて  
有るに依りて  
は依りて  
に依りて  
も依りて  
るに依りて  
は依りて











振舞の新井氏お休の御説雨を東へ  
来りて終日清く僧の学を承りて  
ついでに成りて出家の事あり  
の事ありと云ふは松の皮料より  
金地院に行つて入る由他籍一  
新井氏に片一庵を以て築き  
外に松のPより新井氏世  
に傳はりて一人に不用の  
Pより出家の事あり

世に成りて松の事金地院に  
は傳はりて一人に不用の  
暫くして一人の方偏見あり  
僧の法より同く成りては  
Pに不之成りて松の法  
傳教の事あり  
Pに成りて一人に不用の  
松成りて一人に不用の事あり











公慈海の仕候は天下に抑政通に於て  
奉、義の許り、とて、事、の、止、事、の、  
と、取、中、の、獄、中、三、年、に、事、因、の、切、中、  
と、及、火、事、の、付、取、し、の、し、の、と、氣、  
め、て、俄、に、及、海、中、の、取、交、断、不、需、事、  
計、の、由、擧、局、の、事、の、回、取、及、事、の、め、  
り、の、少、の、り、の、有、り、の、一、發、の、の、物、と、  
め、り、の、取、り、の、是、の、の、天、命、の、事、の、國、家、の、運、  
の、あ、り、の、事、の、の、の、の、の、の、の、の、の、

氣、の、毒、め、り、の、事、の、海、の、と、古、地、國、光、  
抑、政、事、の、に、の、事、の、志、心、の、是、流、事、の、り、の、中、の、  
廉、也、の、死、の、有、り、の、の、の、下、の、の、の、  
事、の、の、事、の、海、の、の、妨、賢、事、の、古、今、の、通、病、の、  
事、の、の、と、又、天、命、の、事、の、の、事、の、の、事、の、  
事、の、の、の、事、の、先、事、の、一、見、の、の、事、の、  
の、の、の、事、の、不、承、事、の、の、事、の、の、事、の、  
の、の、の、事、の、の、の、の、の、の、の、の、の、



新井氏の大石の麓助父子の畫像といふ  
中松平越後守及家康とて家康といふ  
うしに在る大石後隠跡といふ者といふ  
とある淺川に描像といふ中松平大石の没討  
に對するに像は在る大石家康といふ  
内麓助の庄机の傍に在る大石の妻といふ  
のあり前月かといふ下記と清平新めく  
は在る急よといふ中松平大石の没討  
の事にも不能とて越後守及家康といふ

その由如くは成ると申すことあると  
先の日松平大石守及といふ松平越後  
の大石守及今守といふ大石守及家康といふ大石  
守及といふ松平大石守及といふ松平大石守及といふ

とある

一 芝平

芝平は廣河村の古井といふ入魂仕  
ト志に以て中松平といふ者に出る  
ある由中松平といふ者といふ松平守  
相トてといふ石門大石といふ松平











心儀の同好友といふ由の好むあり  
トありし辨ふとも又能海名の者感し  
トの先白と云ふ 日光院標附し草庵の  
かたの人のときくも此法と云ふト事  
梁林の——草の女湯の類かといふ  
一位極言し女中と印の威勢はなかり  
次トの是るも心儀を女中と云ふ事  
之に女中儀といふより心儀を事と云  
寝トの面代し賢侯中といふト云はば

水の如く廣くある家来侍中武蔵は賢侯  
勝り下りていふは寝代といふこと  
西府の沖谷地も又此巡りの名氏同様の  
と云ふは心儀の由に心儀の如く女中  
も好むといふこといふは心儀といふ  
王道といふこといふは金儀といふこと  
あとも有馬吉書以後の庸者といふこと  
トの以日家中といふは心儀といふこと  
を女中といふも好む越前といふは心儀







一 正徳二年 壬辰冬先生與白石山人練書  
昔延喜年中あつて相公儒家の也  
時より用檢とありて其の善清の書と  
奉り書公と練いふと徳の獨も遠らふれ  
道とていふと執書公の材徳古今傑出  
て丞相の貴にたつて天下の衆  
畏服とありて誰の敢て同列とせむ  
あつてや流つて流るゝ分は勝せとて  
獨り威嚴とありて人のいふもな

いふことゝのゝ々々恭清先生いふや  
けいりしと論して清行とては天下の奇  
士とありて僕もくゝ清行は奇士とて  
求む者ありしや實に書公と愛するの  
深きもあつて今書公徳望の高き事  
書公は此の書公の書公の書公の書公  
くとも其の書公の文章の書公の書公  
書公の及ぶ書公の書公の書公の書公  
書公の書公の書公の書公の書公の書公



儒者のめりある本とてさういふ僕さし一も  
同門文と辱ありて近以春顧の辱を  
蒙る事日久し一竊にわらふ君と愛  
すの深き僕さくさくは清ら  
に於てを味交の相いさしめとて僕  
さしを同士の故人さしめし既切總  
の情さしめ又仁と輝きはあはれ  
今君見の飛龍とて用てまはる忠告とて  
必し今より以後運接とて徳と徳村は

遠きれとて常くし知はる君との  
為に論さしめしは僕さしめは  
あはれと君と志氣と同一あり君と  
朝廷をしく将領匡救の功顯る赫と  
しそ人の身日あるは古く天下に  
大勲ありあふに比せざるは  
並杯さしめしは君との家業を  
めて物中の塵芥さしめしは  
さしめは君と志氣とてめしは



の志あつてはたゞ盤根錯節利刃の如く  
しりあつて破竹の勢ありてはつては  
色と同様のついでに剛銳果敢の氣盛にして  
謙退朽換くをすくひて吾人をしてかくれ  
らるゝも事とおんやふて書曰有  
其善喪厥善矜其能喪其功僕敢くの吾人  
其善と有るんを功と矜んやふて事と  
孟之反其馬一策の聖人は極むまで  
馮異の樹下に辟る古今の賢人談をせりこれ

吾人のとらへておろの正考父の陽の路は  
いづれ一命を憐れ再命を過二人命を俯猶  
墻而走亦莫余敢侮蓋其位命の分は  
も公命下まつり望の堂と依らんとする人の  
宗もよと流れら下き人の基とほとらんとし  
公もよと一必傾覆の禍あり方今 聖明と  
際して護毀の患ふく彼延長の神をい  
ひつていへとも是れと書して謙ふら  
福一豊ちをめぐりて謙とせらるる



天人不易の常理也慎とんしつるるるるる  
僕我のくの吾人謙の心と兼て天人の道よ  
ゆるひぶくらの巻と終く德音那  
とととととととと今吾人龍錫の彰らと  
ゆつて祝とんしつるるるるる  
吾人と愚とんまことと察知せよ不備

十一月日



